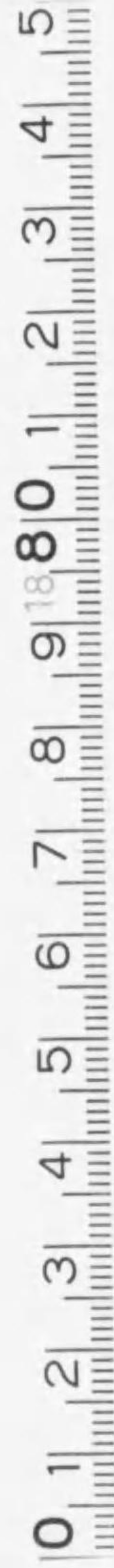


始



小倉進平教授講述

言語學概論

昭和十二年度東大講義

〔第二分冊〕

東京プリント刊行會版



第三節 音韻各論 (續三) ..... 126

第四節 音節之構成 ..... 126

第五章 形態的分類 ..... 143



メ) liquids (pl. -dae 流音)

流音には lateral 側音 } との二種類あり。  
trilled 振動音

先づ lateral としては普通によく知られてゐる如く  $l$  と  $l'$  である。lateral は舌端を歯の裏につけ両傍から息を出す。

英語ならは play ( $p'lɛi$ )

French では table ( $tab'lɔ$ )

この音は発音部にて障害と受けることが少いから所謂 sonor-laut になる。sonor-laut なるため母音と非常に類似点を持ち、ために  $l$  は母音或音節を構成しうる。

この  $l$  といふ音は普通に今述べた如く舌の前方を用ゐて発音されると考へられてゐるが或人は  $l$  の音の本質は hinterzungen-laut でむしろ舌の後部と咽頭の奥懸壺垂の方とを接近させておこる。それが前方で発音される様に考へられるのはその副産物にすぎない。本質的には hinterzungen-laut でその際舌の前方も働くのであるといふ。或言語に於てはそう説明した方が解釋の明瞭につく場合もあると考へられる。

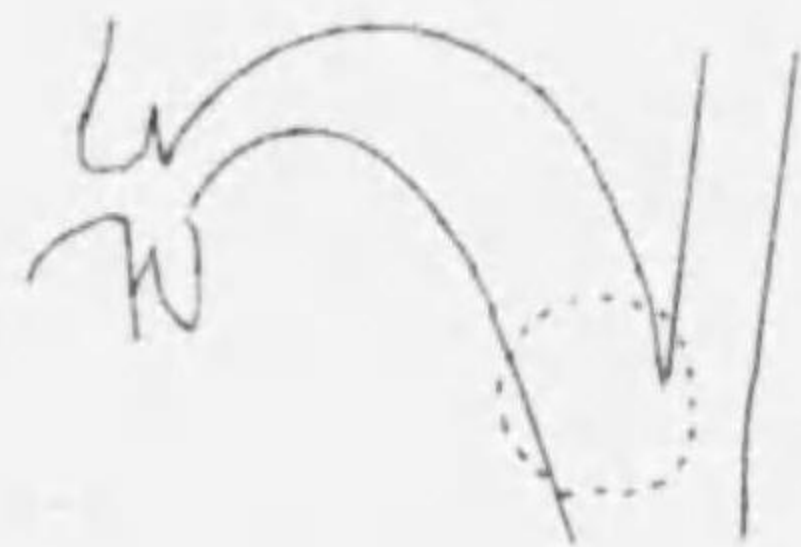
かういふ音は西洋の言語とかアヲ語その他東洋

(102)

の言語にもあるが日本語には普通ないと云はれる。しかし方言などをよくしらべてみると日本語にも存してゐると考へられる。例へば九州及びその附近の島々にある様に思はれる。

trilled の場合その代表的なものは  $R$  と  $R_0$  及び  $r$  と  $r_0$  である。この中で  $R$ ,  $R_0$  は uvular  $r$  と稱するもので懸壺を振動させて発音する。故に我々には困難である。

フランス語やドイツ語に多くある。



très rare

この有聲音の振動をやめると摩擦音が起るところに  $g$  といふ様な摩擦音が起る。

其の stimmlos のものは  $R$  で示し、之は日本語などにはなくドイツ・フランス語に最も多い。

振動音の  $r$  は舌の先端を振動させる。この方は勿論ドイツ語、フランス語にもあり、英語にもあるが英語の  $r$  は振動数が少い。日本のラ行の音は多くの研究をされてゐるが、日本語のラ行の音は振動数が多くなく、或場合  $d$  の音に変換する。それはその  $r$  の振動数が少いことを意味する。

$r_0$  (無聲の  $r$ ) は西洋の言葉に多くある。

(103)

例へば sucre

ドイツ語でも Norddeutsche に於て Karphen の  $r$ 、或は hart の  $r$  等は  $r_0$  である。

この音は日本語には普通ないと云はれてゐるが方言中に事實存在してゐる。東北の方言で

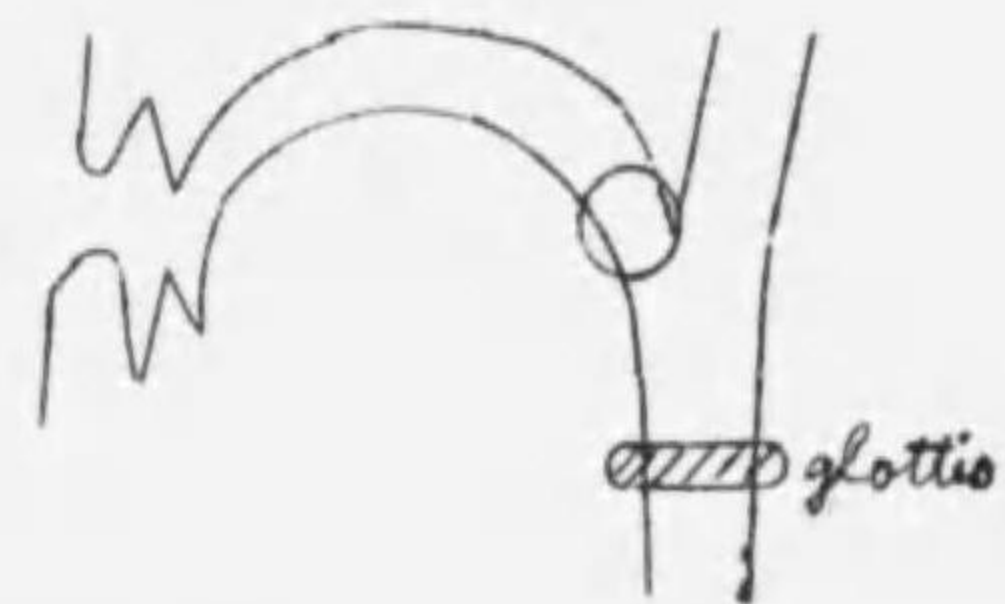
Kuroi 黒いといふ時、

Kuroi といふ発音がある。

$\beta$ ) 摩擦音 Reibelaut

之は前にも述べた如く sonorlaut に對するもので発音器官の一部をせばめたため摩擦が起る。その種類は前に表にて示した如く順を追つて説明する。

glottis  $h$  は glottis で発音されるものであるが、即ち聲帯の所をせばめることにより出す



摩擦音で、日本語ではハ行の ha, ho の場合  $a$ ,  $o$  は口の中で障碍のない筈であるから  $h$  は結局咽喉に於て出される。

back of tongue

$g$  (有聲音),  $x$  (無聲音)

或いは  $g$  に對し  $g$  の文字を用ひ、 $x$  に對し  $x$  又

(104)

はXで表はす。之は舌根と軟口蓋の間隔をせはめ  
ひを発音する時よりもつとせはめる時起る音であ  
る。つまり *hinterzungenlaut* である。故に  
Xの音を振動させると凡となる。この音を具体的  
に説明する一つの言葉があり、即ちドイツ語で  
*ach-laut* といふ。或は *hintere deutsche*  
のXといふ。

この音はドイツ語に最も明かに現はれるが *Spa-*  
*in* 語、スラブ語、トルコ語、アラビア語にも現  
れる。共に對して  $\xi$  の方は非常に多くは使はれな  
い。ドイツ語などでも *Bogen* とか *sagen* の  $\xi$   
が摩擦音である。閉塞音の  $\xi$  は  $\{g\}$  なる音標文字  
を用ひる。日本語には閉塞音の  $\{g\}$  はあるが摩擦  
音の  $\{g\}$  はない。  $\xi$  ( $g$ ) は時として凡になつて了  
ふ。

*Jage* の  $\xi$  は摩擦音である。

front of tongue

(j)            ( $\xi$ )

(j) はドイツ語流の発音の音を代表し、英語で  
は *y-* で表はされるもので夫に對する無聲音が ( $\xi$ )  
である。

( $\xi$ ) 此れはドイツ語などに多く現はれてゐる。

(105)

ドイツ語流の term としては *ich-laut* と云は  
れる。

これは *vordere deutsch ch* と云はれる。  
勿論 *ich* といふ語にはつきり現はれ *dich* の *ch*  
も同様、*welch* の *ch* も ( $\xi$ ) である。

かくドイツ語などに着しく現はれてゐる他 *Swe-*  
*den*, *Norway* 等の *Scandinavia* の言語に  
はこの *ich-laut* が頻繁に現はれてくる。*Swe-*  
*den* 語で頻繁に現れてくる特殊な語として見られ  
てゐる *tjära* の *j* の如き。又 *kjol* の如きは丁  
度ドイツ語の *mädchen* の (*-tche*) の *ch* の如  
く ( $\xi$ ) に當る。日本語でもハ行音の中 *hi* の場合  
には ( $\xi i$ ) の発音である。火(ヒ)と東京邊でシと発  
音されるのは ( $\xi i$ ) と ( $j i$ ) が発音場所が同じだ  
からである。

( $\xi$ ) に對する有聲音が (j) である。 (*ja*): ( $\xi a$ ),  
(*jo*): ( $\xi o$ ) は発音場所が同じである。

point of tongue

( $\xi$ )            (j)

此は舌面と硬(前)口蓋との接触により生ずるも  
のである。例へば

英語の *pleasure* (*plez $\xi$* )

(106)

フランス語 *jardin* (ʒɑrdɛ̃)

(ʒ) に対する無聲の音は

英語の *sheep*

ドイツ語 *sch*

フランス *ch*

日本語 シ (*shi*)

日本語のザ行に (ʒ) が用いられてゐる。

もう一つことに注意しておきたいことは音に *Affricata* といふ現象がある。之は單なる p, t, k の如き子音でなくして、この子音と同様の音を一結にして発音する。

即ち Pf-, Ts, tʃ, tθ の如きを *Affricata* と稱する。例へば英語の *church* (tʃɜ:tʃ) この場合 tʃ は *Affricata* である。

有聲音として *Joy* (dʒɔi) の如き d+ʒ の音も有聲音の *Affricata* である。

しからは日本語に於てタ、チ、ツ、テ、トのチ *tʃi*, ツ *tsu* は *Affricata* で、ダ、ヂ、ヅ、デ、ドある濁音に於ては *da, dʒi, dzu, ……* であり、ザ、ジ、ズ、ゼ、ゾの場合には *za, zi, zu, ze, zo* と普通云はれてゐるが、この *zi* は (ʒi) か (ʒi) か問題となるが一般の日本語にては *ヂ* (dʒi)

(107)

及びジ (ʒi) は (ʒi) と発音されると云はれてゐる。しかしジが (ʒi) か (dʒi) かは人によつて相違があるものと思はれる。

{sɪ-} といふ音の場合により {ʃi} となることがある。日本語の発音は普通 {ʃi} であつて、(sɪ) は {ʃi} より前で発音されねばならぬ。日本語のシが昔 *sɪ* であつたと假定して *sɪ* から *ʃi* になつたとすれば其は *s* の位置が代つたので之を口蓋音化 *palatalisation* を起したといふ。

同じ古の先の音で (ʒ) (ʃ) に類似のものに (z), (s) がある。此は古の一番先と齒槽突起との間をせばめて出す摩擦音で、(z) は有聲音で (s) は其に対する無聲音である。

(z) (英) *zeal* (zi:l) *is* (iz)

(独) *so* (zo:)

(s) *sink* (s-).

日本語のザ行のジが *zi* であるか *dʒi* であるか、又ズが *zu* か *dʒu* かはにはかに決定出来ぬ。

{ʒ}{θ} 此は上の齒の後に舌の先を接近させて生ずる音で、ドイツ語、フランス語になく英語にある。

*this* (ʒis) *bath* (bɑ:θ)

(108)

かく英語に独特なものだが英語の他にもギリシヤ、アラビアの言葉に現れてくる。この無聲音の方だけは Spain 語にも現れ、有聲の方は Danish (デンマーク) 語にもある。

lip and teeth

(v) (f)

上の歯と下の唇の間の狭まりにより生ずる音である。

(v) { (英) very (veɪrɪ) (f) { find  
(佛) vive (vi:v)

日本語に於ては所謂ハ行音は非常に複雑で、ハ、ホは大体 (h) で表はすがヒの時は (ɸ) である。所がフは昔から問題で徳川時代の書きもの、特に Rome 字がきものにはフを fu とかいたもの多く今日の方言中にも fu の音が残つて居り、そのことから昔はハ行全体が f なる consonant をもつてゐたと云はれる。日本語のフについて内外人の観察が多くある中、一例をあげると、

Armfield の云ふ所では

「日本語のフは bilabial (両唇言) で蠟燭やマッチを吹きけすときの音」で、彼自身は [F] と用ひて表はす。彼はこの音に對する有聲音を表はす

(109)

のに [V] を用ひてゐる。

他の人はこの有聲音に [V] をあてゐる。

或人はこの bilabial の f に對し無聲音として [ɸ] を用ひてゐる人あり。かういふ音はギリシヤ語にもあり Africa の Bantu 語にもあり、Greenland の語にもある。

Edward の説明によると、

日本語のフは bilabial の f で中ドイツ語やドイツ語の一部にてきかれるものと同じであるといふ。

しかし日本語のフが全く蠟燭の火を吹きけす音かは個人的の観察により異なるのではないか。歐洲語の f と同じに発音されるのではないかと考へる人あり。

lips

(w) (M) (無聲音)

之は唇の上下を接近させその間から摩擦させる。有聲の W は母音 u に近いが狭窄の程度がより小さい。

wet (wɛt)

M は英語の which (mitʃ)

French の fois (fwa)

(110)

前に (F) に対して (v) があるとした。之は *bi-labial* の音であったが、(v) と (W) とが全く同じではないかといふ人がある。しかし W の方が口の圓め方が強い。

{y} {y}

之は舌の先と硬口蓋の前方を接近させそれに唇の圓みを加へる。故に *i* (j) と似てゐると思はれるが *i* といふ音より接近の度が強く、唇の圓味を加はる。

Puis (pyi, pyl)

{v}(V) (F)

*bilabial* の音で日本語のフがこの場合の (F) で表はされてゐる。(v) は Spain 語の *laber* の *b* は (v) の音である。

ロ) 破障音

之は発音器官の一部が密閉されて息が急激に之を破ることにより生ずる音である。

即ち K, t, P

g, d, b 等である。

この破障音といふものが成立する順序を考へてみると少くとも二つの階段がある。第一は息が或障害により全く引き止められて了ふ場合、第二の

(111)

階段はその息がその障碍の部分を破つて力強く突出するといふ場合である。その二階段の中前の場合には我々の耳には音がまるで聞えない。



例へば P の場合は唇が一変始めに閉じられついで息が唇を破つて出る。若しこの間、ない音を命名すれば *Stummlaut* といふ。次に来る現象として唇が破れた時に P といふ音であることが始めて我々の耳に聞える。

我々はかういふ種類の音現象に色々な名稱を用ひてゐる。

1. *Prohibitivlaut*

*Implosivlaut*, *Verschlusslaut*,  
*Stop*

かういふ名稱は第一の階段の現象をつかまへて命名したものである。又第二には

*Explosivlaut* といふ名稱で呼んだり、

或は *Schlaglaut*, *Stoss* と稱したりする。

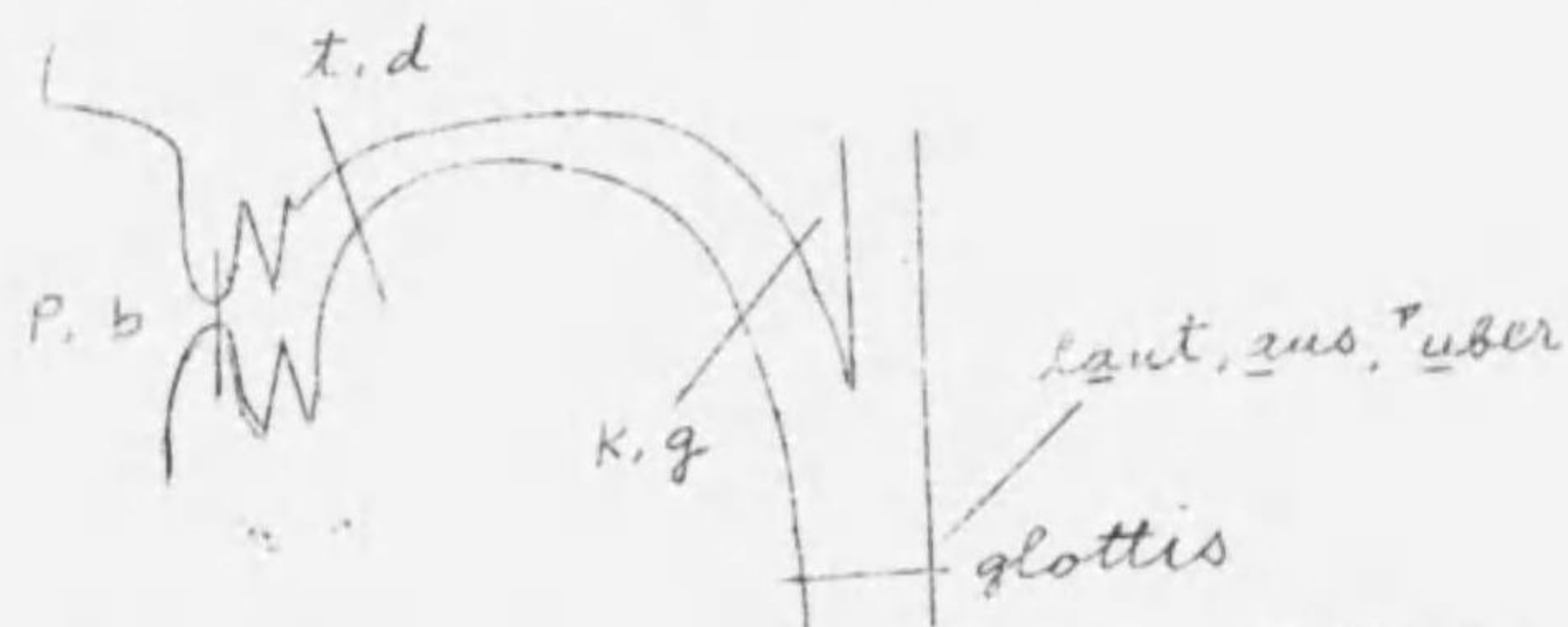
之は後の現象を指して命名したもので、かういふ風に二つの階段があるけれども、一つの現象に二



(112)

この分類を興へるのは普通には厄介なので一般にどちらか一つをとって呼んである。

然らばどういふ種類の音が其に含まれるかといふと前に *p* といふ記号で表した聲帯を閉鎖して発音する音について述べたが、そういうものが発音器官の一番後ろで発音するものである。



発音の位置は圖の如くである。之等が代表的の破裂音である。

*k, g* の場所が本當の破裂音でなく摩擦音になると *x, ɣ* となる。

### ハ) Nasals

前に述べた破裂音は発音器官の一部で我々の息が前へ出ることを妨げられ而もその息が口腔の前方に向つて突破する *momental* なものであるが鼻音の方はその閉鎖が口腔の前方に向つて破裂することなく懸壺室の後の方から鼻腔を経て持続的に流れ出るものである。

(113)

之にも色々の種類がある。前に書き表したり *ŋ* の記号は英語では *ng* で表はすもので之は *back or velar nasal* と呼ばれ、*long (loŋ)* の如きものであり、*think (θɪŋk)* の如きものである。*ŋ* の方は普通には余りない。日本語では考へる(カンガヘル) カンガが *ŋ* に當る。

*n ñ*

之を *front or palatal nasal* と云ひ、フランス語で普通に *gn* で表はす音である。

*Cologne*。日本語でも盤若(ハンニヤ)のニヤが之である。

其に對する無聲音はフランス語では *enseignes-tu* の如き言葉の場合 (*a: seŋi-tu*) *ñ* が現れる。

*n ñ*

之を *dental nasal* といふ最も普通なものである。

*nine*

普通は有聲であるが *n* が無聲になることがある。フランス語の *kanneton (kãntõ)*

この場合特殊の現象として *je ne sais pas* は [*ʒõsepa*] と発音されるのが普通であるがもう一段進むと [*ñsepa*] といふ様な風に発音さ

(114)

れる。特殊な組合せで $\overset{\circ}{n}$ が現れてくることがある。

$m$     $\overset{\circ}{m}$    labial nasal

my

$m$ に對する無聲音 $\overset{\circ}{m}$ がある。例へば(Prism)の如き場合がそうである。rhumatism (rym  $\overset{\circ}{m}$ atism)の場合も同様である。尚又東洋方面に於ては支那の字音としては音は言葉の語尾の  
- $m$ , - $n$ , - $l$  の三つを區別したのである。  
唇内   舌内   喉内

この三つを三内といふ。所がこの區別は次第になくなり、- $m$ は- $n$ に変わり、- $l$ は- $n$ に混同する様になつた。殊に北方に甚しい。之は日本の昔の言葉の上にも着しく現れてゐるもので、時雨に對し鐘禮の字を當けたのはシグのりと鐘の $ng$ に當けたものである。

今宵だに。   <sup>ダニ</sup>今夕彈  
うつせみ。   燈 - $m$

その他支那の字音を假名で書き表はす際、例へば類聚名義抄とか伊呂波字類抄と見るとはつきり三内を區別してゐる。

- $m$    品   ホム  
      侵   ホシム

(115)

- $n$    - $l$

その他我々の讀み方として三位(サンキ-イ)と昔からサンミと讀んだ。之はサンの $n$ は- $m$ の字音であつたからである。

陰陽師   ミヤウジ  
          |  
          - $m$

眞意   シンイ  
          |  
          - $n$

その後発音規則に変化が生じ區別が亂れて来た。今日では- $m$ と- $n$ との區別はなくなつた。

### 音の結合

今まで述べたことは我々の言葉の中に現れる音を一つ一つに分解してその成分を考へてみだものである。然し我々の言葉は實はそういふ一つ一つの音が結合しただけで出来上つてゐるものではない。我々が言語を了解するといふことはその個々の音の上に意味があるのでなく其が一團となつたものの上にある。即ち分解された一つ一つの音は全体の我々の言葉といふ單位を考慮中に入れず抽象的に考へたものであるが其が語の中に這入つて来ると他の element との相関的關係により

(116)

或は音の長さを増したり、又減したり、或は強弱を生ずる、或は高低を生じたり、その他色々他の音から影響をうける。

音韻の各論ではその相関的現象は取扱はぬが、音の結合の場合には他との影響を考へるのが主たる目的である。

i) 音の長さ, *length, quantity*  
*klauer*

音の長さといふことは區別すれば幾通りも種類があるが普通には長音、短音の二つに分け、必要により *half-long* のものを置く。如: 如等の記號で表はす。

音の長さといふことは非常に語の意味に影響を及ぼすことがある。例へば母音でいふなら *wahn* と *wann* では意味が異なる。 *Jäler - Jeller* .

日本語でも子音について云ふと

未て — 切手

時 — トーカー

空氣 — 莖

音の長さは言語内容に對して重要な役割をするが注意すべきことは音の長さといふことは母音に関してのみ考へられ勝ちであるが子音に関しても

(117)

音の長短がある。

未て, *ki-te*, 切手, *kit-te*

切手の *t* は未ての *t* より長い。

ii) 音の強さ, *Stärke, stress*

息の強さの意味で聲帯の振動によつて生ずる音波の振幅の大小をいふのである。 *accent* といふ語とかりていへば *Stärke* によるものは色々な名前で呼ばれる。

*expiratory accent*

*dynamic accent*

*emphatic accent*

*stress accent*

息壓 *accent*, 或は單に壓 *accent* といふ。

この *stress accent* はその強さにより三通り位の階段を設ける。 *strong, weak, half-strong* の三つである。

英語で云へば *contradict* の場合、この中に三種類の *accent* が現れる。 *dict* が最も強く、 *tra* が一番弱く、 *con* がその中間である。その中で一番強い *stress* で発音される *syllable* が *stress accent* ともつ。英語で長い綴りの語に於ては *stress* のあるのは大体二つの音節に於て

(118)

である。その中の一つは *strong* で、もう一つは稍弱いものである。

*impossibility* の場合 *bili* に最も強い *stress* がある。 *im* が其に次ぎ、他は弱い。

*impossible* の場合は強い部分は *-pass-* だけで他は弱くなるといふ現象がある。故に *stress* は強弱が一つの語の中でも絶えず現れてゐる。 *stress* の置き方により同じ綴りや語源の語でも意味が異つて来ることが多くある。

{	<i>conduct</i> (n.)	<i>attribute</i> (n.)
	<i>conduct</i> (v.)	<i>attribute</i> (v.)

歐洲の色々な言葉にこの現象が多く存する。

*stress accent* は特に或音或は一音節を *emphasize* するものであるから時とするとその近くにある所の音とか音節を犠牲にするといふ現象が起る。即ち *accent* のある語には特別に力を入れるが *accent* のない音節には力を入れない。その結果として *accent* のない音節は屢々脱落するか弱まつて了ふ。そういう事は *Europe* の言語に多い。

*Latin* 語は *classical Latin* に於て *accentuation* は今日の英語の如く *stress* で

(119)

あつたと云はれる。或 *syllable* の母音に *accent* がおかれると他の母音が弱められるといふ現象が起る。

*'ago* は本来 *a* に *accent* があつた。 *sub-ago* となると *sub* に *accent* があるため *sub'-ago* の *ago* が *-igi-* となり *subigo* として今日残つてゐる。

故に一方に強い *stress accent* があると他の母音は弱つて了ふ。

}	<i>prophet</i>	の如きは <i>pro</i> に <i>accent</i> がある
	<i>profit</i>	

ため語尾の発音が不明瞭となる。

今度は *syllable* が全然落ちて了ふ現象もある。

ラテン語の *est* は古くは *esti* といふ形から出て来てゐる。所が *'esti* の *e* に *accent* があるため語尾の *-i* がおちたのである。同じ *Indo-German* 語族でもギリシヤ語には *stress-accent* は起らぬと云はれてゐる。

英語でも *stress accent* が行はれてゐる。

*business* (*biznis*) は *bu* に *accent* があるため次の母音が消滅して了つた。

(120)

*chocolate* の場合にも *cho* に *stress* があるので *co* の (o) の音が消えてゐる。

後世の *Latin* では *accent* の性質が変化して来た。

ヨーロッパの言葉では *stress accent* が重要性を帯びてゐる。

*stress accent* は其が *syllable* の上に置かれる位置により種類がある。

- 1) 始めが強く後が弱い。下降的 *sinkende*
- 2) 始めが弱く後が強い。上昇的 *steigende*
- 3) 始めと終りが弱く中が強い。 *steigende-sinkende*.

記号で示す時は 1) > 2) < 3) < > と記す。

*stress accent* は一つの音の場合に考へられるだけでなく其が一つの語の場合にも考へられる。一文章の場合にも考へられる。即ち一つの語の場合について其を一つだけ取り離してみるとその語には特有の *accent* があるがその単語が含まれて文をなす時その文の成分をなす語は固有の *accent* を失つてその文の一部として別の *accent* をとる場合がある。 *syllable* にも語にも文にも特有の *accent* がある。

(121)

もう一つ *stress accent* について考へねばならぬことはヨーロッパの言語では二重母音がある。即ち二つの母音が結合して一つの音節をなし一方の音が主となり他が従となる現象である。 *ai* の場合 *a* に *stress* があり *i* は弱い。かういふ点からみて *a* は音節的母音 *Silbischer Vokale*, or *Sonantischer Vokale* (自鳴音) と云ひ、 *i* の方を *Unsilbischer V.* or *Consonantischer V.* (和鳴音) と稱する。この二重母音も亦之を紐立てる母音の強さの関係により三つの區別を立て得る。

*ai, au* の如く前の方が後より強い時 *sinkende*.

*ia, iu* の如く後の方が前より強い時 *steigende*.

下降と上昇をかへたものが中間的なものである。次に音の高低について述べる。

音の高低 *pitch, Ton*.

之は聲帯の振動数によって定まる。前の強さの *accent* が息壓 *accent* であるとするれば之は *pitch accent* とか *musical a.* とか *chromatic a.* と呼ばれる。 *Europe* の多くの言葉は *stress accent* であると言はれくるが *Sanscrit* であるとか古いギリシヤ語は *pitch accent* とも

(122)

つてゐたものである。例へばギリシヤ語についていふとその事柄は色々な方面から證明し得る。文法の記載とか accent の system から分るがギリシヤに於ては古く Byzantium の Aristophanes が發明したといふが、紀元前二世紀頃の Aristophanes がギリシヤ語の発音を正し、保存しようとして accent の規則を設けた。

1) acute accent — accent aigu (´)  
steigende なるものである。

2) grave accent — accent grave (`)  
下がるものと平々な form とである。(Look here!)  
そして accent の記號をつけぬものは grave のものと考へられてゐた。

3) Circumflex a. (¨) — accent circumflex  
之は始めは上つてそれから下がるもの steigende — sinkende のものである。

ギリシヤの古い語では皆 pitch accent であるが modern Greek では stress が勢力を得て来た。

pitch accent は各々の syllable 或は音が其に特有の pitch をもち互ひに尊重して相犯すといふ様なことが着しくなく、従つて stressed

(123)

accent に於ける如く或音が弱まったり全然落ちて了ふ様なことがない。

Indo-german には古くからあり、ギリシヤ、ラテンにもあるが、こゝに最も注意すべきはギリシヤ語に於ける pitch accent で gradation といふ現象を生じてゐることである。(Hblaut)。殊にギリシヤの gradation は pitch accent により證明される。

gradation といふ現象は如何なるものかといふと、元來母音を觀察すると各々の母音に夫々特有な高さが定つてゐる。例へば e と o の pitch とをくらべてみると e といふ音の方が o といふものよりも常に高い。音の性質として本來 e の方が高いのである。古くギリシヤ語などに於ても pitch の高い音節の所には e といふ音が現れ、低い pitch の音節の所には o といふ音が自然現れてくる現象がある。例へば φέρω (tragen) の場合に accent が第一音節にあるからこゝに e といふ母音が自然に現はれてくる。所が第一音節の accent が後へ移ると accent が移つたため第一音節は弱まってこゝに o の音が現れてくる。φέρω.

さういふ具合に語の内容の変化に従つて母音の

pitch の置かれ場所が異り其に従って母音が別のものに变化する。之が即ち gradation である。e → o, e → a といふ様な色々な series が現れてくる。或母音に pitch があるかないかにより他の母音に轉じるのが gradation の現象で之が即ち Ablaut の現象である。Ablaut は古い所では pitch の上に置かれたが後には場合に依り stress の上に置かれる。

Ablaut は廣義に使はれ man - men とか foot - feet 等の变化、binden - band - gebunden の如く意味の違ふかに従って語幹中の母音が变化するのとやはり gradation といふ。その母音の变化は夫々歴史を異にしてゐる。swim, swam, swum の如し。Ablaut には或動詞中の母音が変わつて違つた意味に用ひられることもある。

mi (三) - mu (六)

yo (四) - ya (八)

の如く倍数を表はすことがある。かゝるものをも一般に gradation と稱してゐる。

日本語に於ける accent はどういふものか？  
勿論中には stress によるものもあると思はれる

が大体 pitch accent であると今日見られてゐる。日本語に於ては或 syllable がやたらに落ちて了ふことがないといふことである。Europe の言葉に於ては一方に accent があると他方の母音が落ちる場合があるが日本語ではかゝる現象が先がないと考へられる。

ame (雨) - ame (飴)

尚 pitch accent は stress a. と同じ様に音節上に置かれる様式により fallende のものと steigende のもの。又 steigend-fallende の三種類がある。

Europa の或人の表はし方は

fallende \	} の記號を文章の上につけて示す。
steigende /	
steigend-fallende ^	

近頃我が國でも accent を現はす時は上型、中型、下型に分ける。

即ち あびる  
下中中型  
あはく  
下上中型

の如く三つの型を設けることになつてゐる。この





(128)

ことは生理的の側から見ても當然である。発音器官の状態により左右される。

或々の語は此等の色々複雑した変化があるので、  
こゝで始めて単調が破られるといふことになる。  
しからばその音節を構成する音は如何なるものかといふのに、大体から云つて有聲音は無聲音より響きが大きく、有聲音の中でも母音が一番響きが大きく、共に次いで流音、鼻音が之に次ぎ、次いで摩擦音、最も響きの弱いのは破裂音である。

流音の例、little

次に一つの語の中にある各々の音節は夫々その強さに相違があるから従つてその近所にある音がお互いに或一種の影響を及ぼすことになる。或語中に —kle— なる個所があるとすると l といふ流音は k といふ破裂音より響きが大きく l は遂に k を従属的なものとなし、l 自身がその支配者となる様な現象がある。又 *pitch accent* の場合についてもそれの有る音節はそれの無い音節より響が高く、その一番高い *accent* の有る部分が支配することとなり、又 *stress accent* の場合も同様である。

或一語中にも *accent* の階段が現れ其を表はす

(129)

のに *principal a.* 又 *secondary a.* といふ。

尚又一つの語には夫々其に特有の *accent* があるが、山ヤマ、花ハナ 等の場合其を一つとリ外してみると特有の *accent* があるが、しかしその語が談話中に連入つてくる場合には各々の語が固有してゐた所の *accent* が文全体の一部分を形成するとその本来の *accent* を失つて了ふこともある。

一定の語の *accent* は *satzaccent* では本来の *accent* を変ずる。

文字の中でローマ字とかトルコ文字とか満洲蒙古の文字、朝鮮ノ諺文は語を形成する音で最も小さく分ちうべき、最も小さい *unit* を表はすもので、かういふ或の文字を *alphabetic* の文字といふが、日本の假名の如き文字例へば オKa は単一の音を表はすものでなく数個(原則として二つ)の音が集つて一音節をなしたものの上に築き上げられたものである。但し ン の如きは例外とみて其以外の一般的構造は今述べた如くである。かかる文字を音節文字といふ。

(130)

### 第五 音の同化 *assimilation*

音節を構成してある各々の音は夫に特有の性質をもつてあるが、その近くにある音の影響によりその音の性質を変化する、之を音の同化といふ。

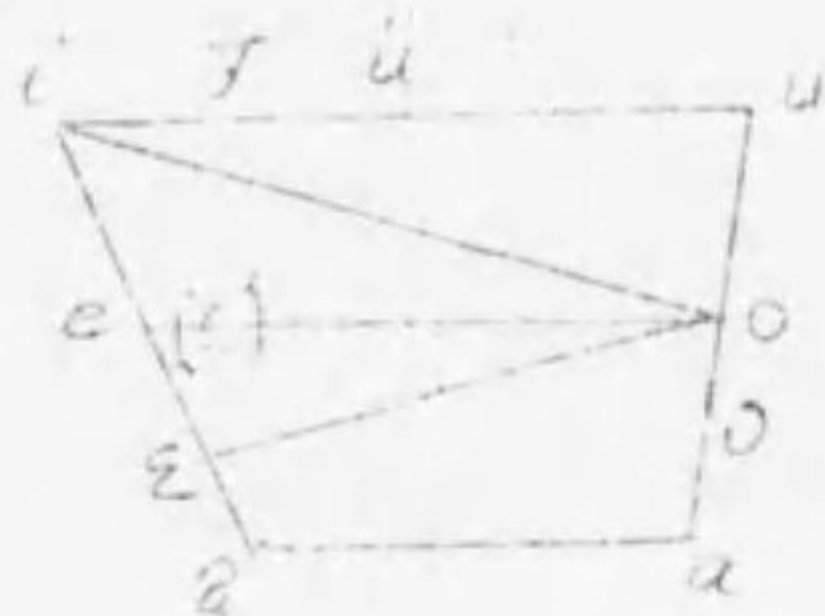
*Sandhi, Wohl laut, assimilation.*  
日本語の音便に當る。

無聲音の前に有聲音があるとその無聲音は有聲音に影響されて有聲音になつて了ふ。母音があつてその隣りに鼻音があると  $a|n$  の場合の如く  $a$  が鼻母音化する。

或音がその隣りにある音の影響を受け全く別の音に變つて了ふ。 *assimilation* の現象は非常に複雑で母音と母音、子音と子音、母音と子音との間に起る。

イ) 母音間の同化

$o + \epsilon$   
 $o + i$  } =  $\bar{o}$   
 $o + e$   
 $u + \epsilon = \bar{u}$



重母音をはなれてもつと密接になり第三の音が現れる時其が *assimilation* である。  $ai$  が両

(131)

方から接近して  $e$ ,  $\epsilon$  になる例があり、日本語にもその例が多くある。

$au$  の両音が接近して  $(o)$  或ひは  $(\bar{o})$  となることがどこの國の言葉にも見られる

*audible*

合ふ  $afu - au - \bar{o} (\bar{o})$

そういふ風に母音が隣り合つて影響を及ぼすことが多いが或場合にはその中間に或音を距て、影響し合ふといふ現象がある。この現象は色々な言語にもあるが最も著しく興味あるものは *Ural-Altaiic* 語族にある母音の調和 *Vocal-harmony* の現象で、要領を述べると、

Stamm	+	Suffix
語幹		助辞

この *Stamm* と *Suffix* 中に母音があり、その *Stamm* 中の母音は *Suffix* の母音を自分と同一或は類似した母音に変化させるといふ現象である。其については母音の種類が之等の語族には数種あり、ウラル語族に属する *Hungary* の *Magyar* には母音が多くあり、其が三種に分類される。

(132)

harte	a	á	o	ó	u	ú
weiche	e	ö	ö	ü	ü	
mittlere	ê	é	i	i		

之は滿洲語蒙古語の母音も同様で、その場合に Stamm の所に harte の母音があるとこの Suffix がやはり強母音になる。

Stamm + Suffix  
a, o, u.      a, o, u.

Stamm に harte の母音がある時、Suffix に weiche の母音が現れることはない。mittlere の母音はどちらにも通じうる。故に Stamm に harte の母音が現れる時には Suffix の方はやはり harte か或は mittlere の母音が現れ、Stamm に weiche の母音が現れる時は Suffix でも weiche 或は mittlere の母音が現れる。

- nek (..... =) (dative)  
suffix.

ház (家) なる語が Stamm となる時は (家 =) といふ意味を表はすために - nek は - nek となる。

(133)

ház - nak

toll (Feder) - nak

relative (--- から) といふ格には - röl  
といふ Suffix を用ひる。

Kert (garden) - röl

für の意の Suffix とし - ert がある。

ház - ert

Kert - ert

この é は mittlere のもの

であるから harte と weiche の両方の母音に感じうる。かく Stamm の母音が Suffix の母音を支配する。

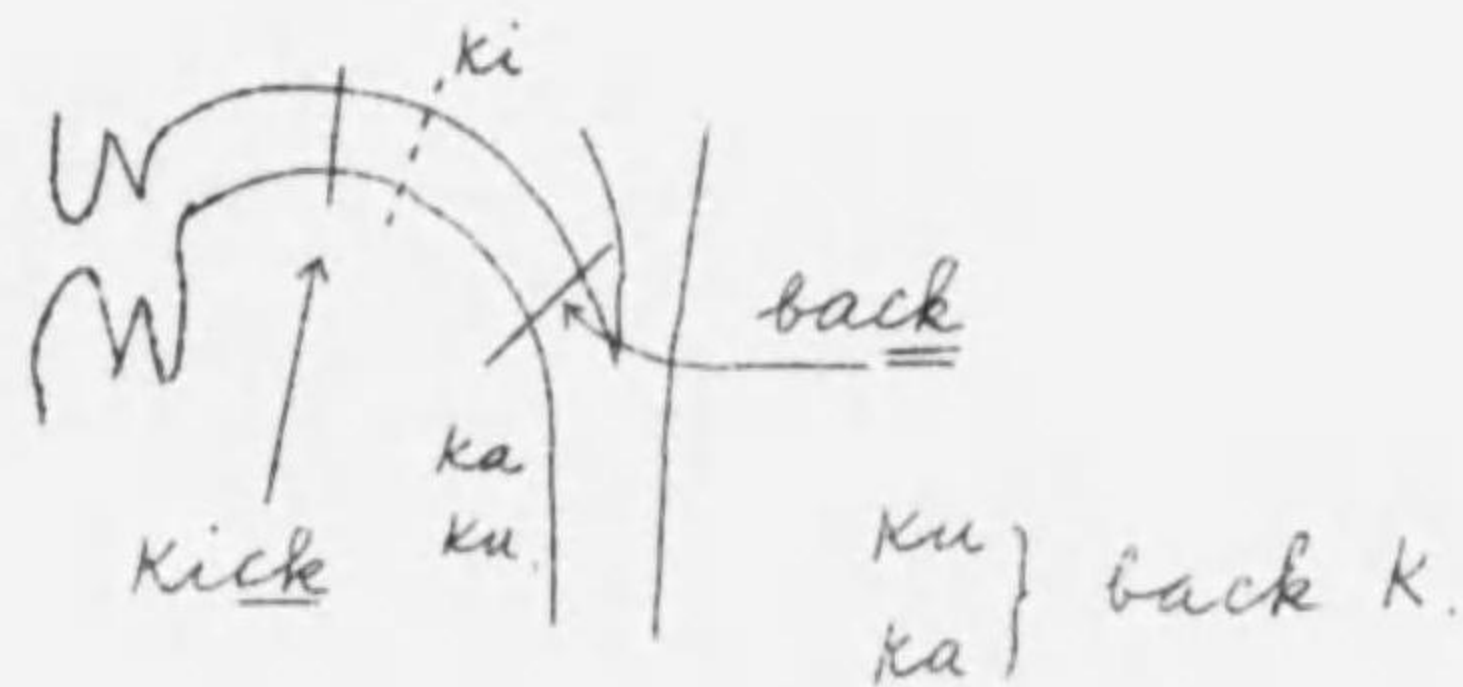
もし Stamm に - e- なる weiche の母音が現れると Suffix の - nak は - nek にならなければならぬ。其等の場合 - nak - nek の内容は全然変らず、單に母音が變つただけである。この点が注目すべき点である。其が Magyar のみならず Finland, Lapland, 滿洲、蒙古、トルコ、朝鮮にも現はれてゐる。之は語の系統を考へる時重要な校閲をする。

ロ) 母音と子音との同化

この場合には又色々の種類があるが、先づ第一に母音が子音本来の発音位置を及ぼすことが

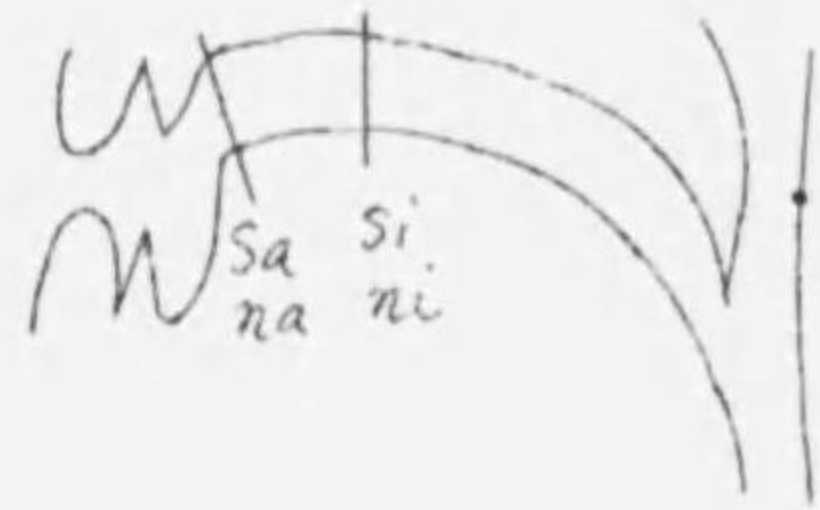
(134)

ある。  
K.



ki front K.

かかる back K と front K を (q) と (k) で區別することもある。ka といふ場合には K は back K で ki の時には K は front K となる。かく本来は back のものが口蓋面を挟ぶことがある。



此等は何れも口蓋面を利用する。かういふ風に特に口蓋を使って発音する現象が Palatalisation 或は Palatalisierung, Mouillé, Mouillierung と稱される。ki - chi も一種の palatalisation である。Kirche といふ palatalisation は back のものが front と

(135)

なり。front のものが back となる二つを合むが、口蓋化することではなく前方のものがずっと喉頭の方に向つて退却する現象もある。u の如きは喉頭の方で発音される。即ち咽頭音化 Pharyngalisierung が起る。かかる現象は Semitic 語に着しい。

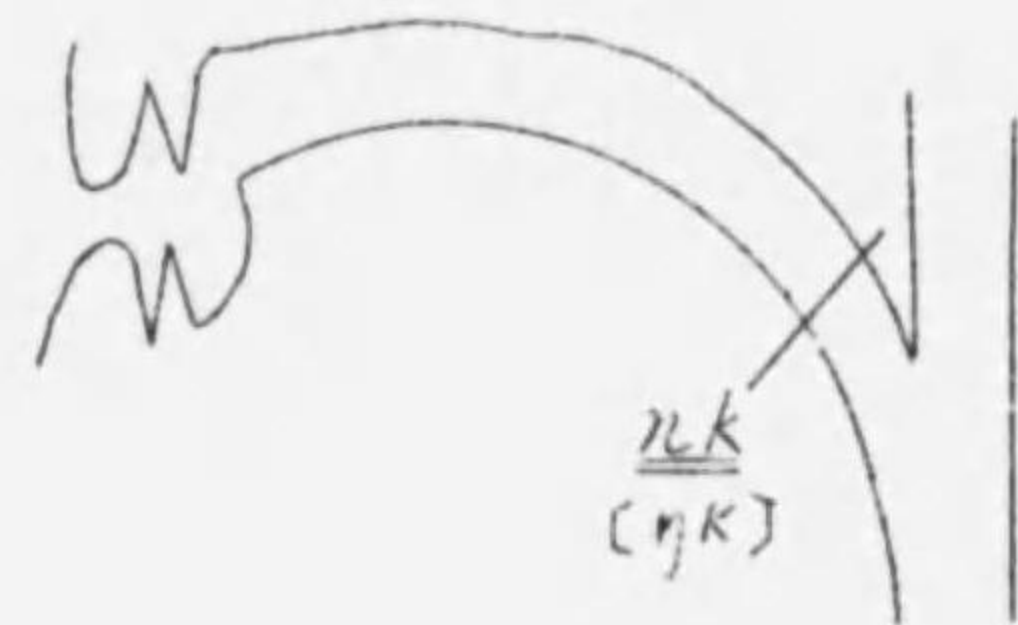
後方に行くのでなく前の方に行くこともある。

hu > fu

之を Labialisierung (唇音化) と云ふ。

ハ) 子音が他の子音の発音位置を突変させることがある。

think



勝ちて kati-te > katji-te > katʃi-te > kat̃-te

(Latin) cum - lego  
lectus

col - lect

ニ) 有聲音が無聲音になり。又無聲音が有聲音

(136)

になる現象。

sit down  
-d

médecin, observer  
[metsɛ̃] [ɔpsɛvɛ]

かういふ現象は日本語でも *amagasa* の様な連濁といふ現象の場合である。

ホ) 同化の方向

同化の現象はその影響の及ぶ方向により三つに分けることが出来る。

a) *progressive assimilation* 即ち前にある音が後についでくる音と同化するもの。この前述べた *Ural-Altaiic* に存する母音調和はその例である。その他國語に於ける連濁の現象の如きものも其である。その他英語で *observe* の場合の *r* は本来無聲のものであるが *r* といふ有聲音に同化せられて (z) となる。

ハ) *regressive assimilation* = *progressive a.* の逆のものである。

*mann* → *männer* a が e に影響されて e の音に近づく。

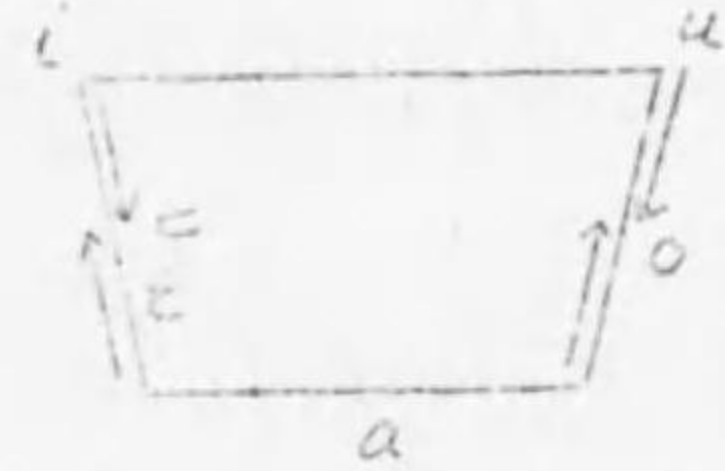
(137)

前に述べた *gradation* の現象も多くはこの *regressive a.* の結果に依って生じたものである。

シ) お互いに影響し合ふ *Reciprocal assimilation* が第三のものである。

a u

a u が両方から歩みよつて *o* になる如き例



又 *a* と *i* との間にも *e*, その音が生ずる如きは此の例である。

ヘ) *assimilation* の程度

この同化が完全に行はれるか否かにより二種類の別が生じる。

完全に行はれるものは *complete assimilation* 或は *total a.* と云ふ。

in - lumen  
↓  
il - l (umination)

God - spel (spel は story の意味)

s - s

↓  
Gospel

此等の例は完全同化である。

*incomplete assimilation, partial*

(138)

assimilation 同化の完全に行はれないものである。

kemp A.S. henep

この場合彼のeの音は消えて了ひ dental の音 n と labial の音 p とが並びこの場合nが完全にpになるのは complete a. であるが、完全とまでは同化が行はれず、このnをpが先づ labial にしようとするが其が出来ない時にはnが nasal の音であることはそのままとしてその鼻音を発する位置だけを labial のものとし、かくして此の音が現れる。

音の不同化・dissimilation

assimilation の方は違った音がか互ひに同類の音に接近しようとするのだが、この場合は同類の音が集合するのを嫌って反対の音に変ずるものである。

長母音 a: i: u: e: o: の如き場合余り長い調子で其を引っぱるのが好ましくない時その長い音が diphthong になる。

① = ni: ij

② = ne: -ej

Spain を Spain と発音する如きもの。

(139)

性質の似た音は出来るだけ違った音に発音しようとする。今度は母音が二つ並んだ様な場合その二つが似てゐる音だと其と違った様に発音する。

Bein i-  
(ai) e  
æ  
a

day  
(ei) → (æi)

不同化の一現象として所謂 hiatus といふ現象がある。

Co-operation の如く二つのoがある時、co の所で一度切る現象である。

ka-ai (場合)

この際同じ音を切つて云ふのは不便であるのでその間に渡りの音を入れる。即ち bajai と云つたり、bawai と云つたりする。之も dissimilation の一現象と考へられる。

ト) glide わたり

こゝに二つの音が結合して並んでゐる場合に例へば母音でいふなら au の場合に之を単に au の聯合であるとしてぬき出していふ時は別だが我々の話の中に違入つてくる場合は au は単に機械的

(140)

に *a* と *u* が並んだものでなくして實際上の発音では *a* と *u* との間にも一種の中間の母音が透入してくることを認めねばならぬ。

ame 両

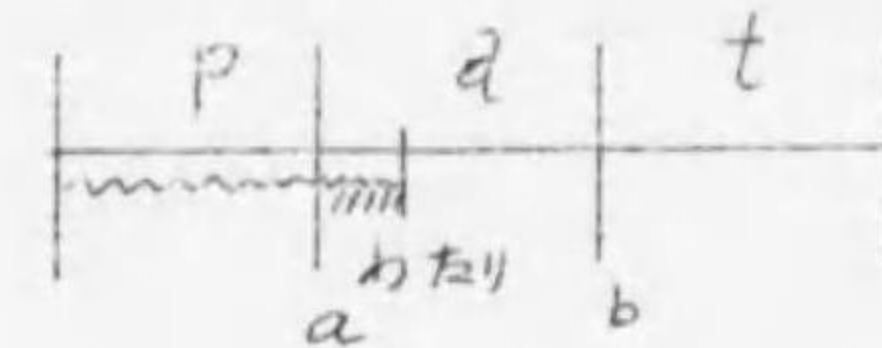
*a* と *m* との間には *a* から *m* に移る場合相當の距離がありその距離を走つて行く間に発音器官から何等かの影響を受け、明確な文字では表はせないが或中間の音がある。 *m* と *e* の間に於ても同様である。その中間的音を我々は *glide*, *gleit-laut*, (*Übergangslaut*) といふ。

このあたりは或音から或音に移る時普通に成々が認めうる。単一の音を発する場合にも *glide* は見れてくる。 *p* を発音する時破裂といふことがこの音の最大条件であるが破裂した直後に極めて軽い *aspiration* を伴ふ。即ち *ph* の如く *h* の音と伴ふ。之が一種のわたりの音である。

もといふ音の場合に於て破裂が起る前のことを考へてみる。上の *p* とは少し違ふ。 *u* はその破裂の起るすぐ瞬間の所でその前の所に一種の母音的波動を感じる。それから尚破裂の終りの所には *aspiration* の様な感じは起らない。しかし或一種の母音的の響きを少し伴ふ。故に *glide* は

(141)

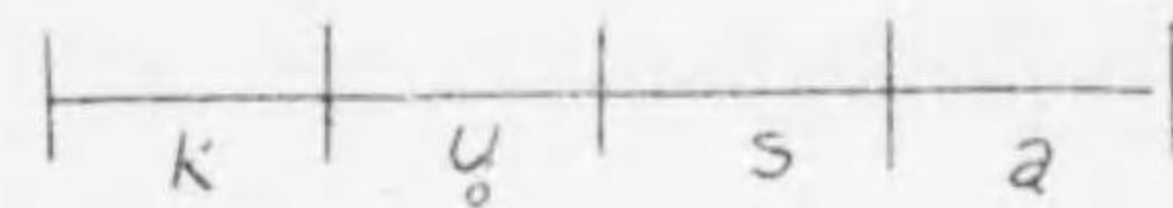
或音から或音に移る時のみならず或一個の音に於ても存在してゐる。或音の始めに渡りが来る場合其を *on-glides*, *Einsatz* と云ひ、後に現れるのを *off-glide*, *Absatz* と云ふ。尚この *on-glides*, *off-glide* 之他の音についてみると、例へば *pat* といふ文字を圖に表して文字の數により分解してみると。



*p* と *t* は無聲音であり、*a* は有聲音でありから *a* 点に於て音が終り *a* の音が始まると考へられるが實際に於ては *p* 音が破裂の餘韻を *a* の領分にまで透入りこませてゐる。そのくひ込んだ所が *p* から *a* に移る渡りの部分である。

この *glide* といふものは個人によつても又夫々の國語に於ても異つてゐる。

クサ *kusa*



*u* は無聲になる。 *a* は聞きつばなしの *a* でなく *flattis* の所に閉鎖が起るといふ現象が起るが

(142)

之も *glide* と考へられる。尚言語によつて *glide* が違ふといふことは例へば英語とフランス語の場合 *robe* の *r* といふ *off-glide* の時どういふ現象が起るか。英語では *-b<sup>h</sup>* の如く軽い *aspiration* と伴ふのに対し、フランス語では *-b<sup>u</sup>* の如く母音的の *off-glide* を伴ふ。英佛人が第三者の言語を聞いた場合 *r* が實際に於て *h* を伴ふ音 *b<sup>h</sup>* である場合、英國人は自分の発音と同じなので之を不思議とは思はず *b* の音で示す。しかしフランス人が之を聞くと *b<sup>h</sup>* の如く書き表はすこととなる。*b<sup>h</sup>* の音と表はす際両国人により相違が起る。かゝるものを例へば日本人が見る場合にはどちらが正しいかに對して疑問を生ずることとなる。

このわたりの音は非常に微妙なもので文字の上には現はれてくることが少い。文字の上には表されなくてもよろしいし特別の発音の上に現れないこともあるが、時によると *gleit-laut* が特別に発達し、発音上にも明かに現れ、文字の上でも書き表されることがある。

*ba-ai*  
↓  
*bajai*, *bawai* の如きものがその例

(143)

である。

フィルム と書いてその発音を示した場合 *イ* なる文字に非常な生命を興へて *ファイルム* としたり、*fan* ファン と *フアン* としたりする場合もある。

### 第五章 形態的分類

言語を分類する場合に於て大体二つの方法が存在する。一つは系統的分類、一つは形態的分類 *morphological classification* である。

系統的分類は言語の系統を標準として分類する方法であるが、形態的分類は言語の形態を主として分類する。

形態とは何かといふことは *morphe* といふことは *form* 形式といふことで、*morphology* は名詞とか動詞の語尾変化を一切含めて *flexion* と稱し、其に関することは勿論、尚又 *flexion* に関することを普通 *Formenlehre* といふが、其に関することのみならず、語がどういふ具合に紐立てられて *phrase* などを作るか、*Wort-*



(144)

*bildungslehre*. 又 *syntax* に関する法則までも含めるのが *morphology* の範囲である。そういふことを基礎として言語の分類を試みるのが形態的分類法である。

系統的分類の方は血縁のあつかいといふことを標準として語族を設けるのであるから研究者の主観的立場により多くの部類が生じる。所が形態的分類の方は其とはやゝ異り、前者の様にその数が幾つでもといふ風にはなり得なく、その種類は餘程制限されてくる。

こゝに注意すべきことは系統的分類と形態的分類とは分類學上全く觀察の *standpoint* と異にしたものである。故に或系統のものは其に特有な或形態をもつてゐるとは云へない。又同じ系統の語族でも又々形態を異にすることもあり、違つた語族であつてもその形態が同じな場合が随分多い。

しからは言語の形態的分類は今日までどういふ風にされて来たか、徒未行はれて来た主なものを次に述べる。

Friedrich von Schlegel の分類法はその著 "Über die Sprache und

(145)

*Weisheit der Indier* "の中に現れてゐる。即ち言語を無機と有機との二つに大別した。

Unorganisch	{	flectionslose
		affigierende
Organisch	{	flectierende

この内意は第一に *flectionslose Sprachen* については「支那語では意義の制限に用ひられる所の *Partikeln* は其自身に於て独立し得る所の且つ語根部から独立して存在しうる所の *Ein silbigewort* (一音節の語) である。

㊦ *Partikeln*      人 *Wurzel*

㊧ *Wurzel*      ㊨ *Partikel*

そしてこの *Partikel* なるものは本来は大自身に於て独立しうるものであつた、而も今日に於ては *Wurzel* について *Partikel* になつてゐるが *Wurzel* から分離して存在し得る。

*affigierende* (*agglutinative*) *Sprachen* はこの種類に於ては *Grammatik* は敬頭敬尾 *Präfix* と *Suffix* により作られ、之としてその *Präfix* 及び *Suffix* たるや語根と容易に區別しうるものであり、而も尚其自身としても一つの意義をもつてゐるものである。しか

(146)

しその附加的性質をもつ Partikeln はその時既に語根そのものと固く融合し始めてゐるものである。

flectierende のものはこの言語 (Indo-germanisch) に於てはこの Wurzel 語根はその Wurzel の示す通りに一つの生きた lebendiger Keim である。即ちこの關係的概念が innere Veränderung 内的変化により表はされ、その働く範囲が自由にいくらでも発展しうる可能性がある。そしてこの単一の Wurzel から出発したものは總て親族關係の印象を與へ互ひに密接な關係をもつ。この種の言語をみると一方に於て Reichtum 豊富といふことがあり、一方 Krautkraftigkeit があるのは寧ろ以上の關係に依るものであつて此等の言語が organisch に組立てられ、一つの有機的な織物をなしてゐると云はれるものは決して偶然でない」といふ。

次に Schlegel の説に稍變更し、之に修正を加へたのは Wilhelm von Schlegel の説で、この説は前の flectierende の言葉と更に Synthetische (langues synthétiques) と Analytische (langues analytiques)

(147)

の二つに分けた。即ち彼はかういつてゐる。「この flectierende の言葉に於ては (langues synthétiques), (langues analytiques) analytique と稱するものは substantif 名詞の前に article を置くもので synthétique の方は article をおかないものであつて語尾だけで格を現はす、analytique の方は動詞の前に代名詞をおく。

ea, le, der, das | bellum  
② love | am ②

Conjugation の場合 analytique の方は助動詞の力を借りる。

I shall love | amabo  
analytique の方は名詞の Case を表はす場合は preposition を用ひる。

of nose | rosae  
形容詞の比較級に analytique の方は adverb と用ひる。

more altus altior altissimus etc.  
most

synthétique の方は古い時代の言語に存したもので analytique は後発達し、現在の語

(148)

は *analitique* のものは分解により起った。」

Friedrich Müller は Schlegel 兄弟に倣ひ

A. Unorganische Sprache

I. Sprachen ohne grammatische Struktur. (支那語)

II. Sprachen mit Affixen (alle Sprachen mehr silbigen Baues mit Ausnahme der indogermanische.)

B. Organische Sprache

III. Flexionssprache (die indogermanischen Sprachen)

a) Synthetische (alten)

b) Analytische (die neueren -ing.)

に分類した。

Bopp の分類法

Bopp の "Vergleichende Grammatik" 中にあり、三種類に分けてゐる。

1.) 一音節の語根を有するものであつて *Zusammensetzung* の能力なく、従つて *orga-*

(149)

*nismus* といふ機能を缺き従つて *Grammatik* といふものがないものである。支那語は之に属する。即ちこの語は總て *Wurzel* が裸である。(na-akte *Wurzel*)。又の意味は *Wurzel* の位置により知られる。

山川といふ語は山と川とが並んだだけで *Organismus* を缺きその間に助詞とか語尾の変化がない。單に語根が集つてゐるだけである。大山と山大とでは意味が違ふ。

2.) 一音節の語根ではあるが *Zusammensetzung* が出来るものである。独りでは *Organismus* に到達出来るのであつて、従つて *Grammatik* を表はしうるものである。語を組み立てて行く方法 *Wortschöpfung* (-*Bildung*) の根本の原理は動詞的の語根と代名詞的の語根との結合による。これには *Sanscrit* 系統の言語、前に述べた第一番目を除外し次の *Semitic* 語族を除いた他の言語がこの中に這入る。支那語の如きは語根の並列であるがこの第二のものは語根が結合接近し易く *Organismus* を発生しうる。

動詞的の語根に代名詞的の語根がついて出来上る。

(150)

am 一代名詞的語根  
動詞的語根

### 3.) Semitische Sprachen

grammatische Formen (動詞名詞の語尾変化)を作る場合には第一には第二ヶ條に述べた如く *Zusammensetzung* に依るのは勿論あり。これ他に語根に單なる内的変化を興へ、其によつて grammatische Formen を作り、之が Semitic の特徴である。

Semitic の特徴として語根は大體三つの子音から成つてゐる。之に或共通な一つの独立しない意味がある。その変化はその語根の外部につけ加へるのでなくその内部に色々な母音をさし挟んで其により語根の意味を變ずる。

Schlegel は Semitic 語を affigierende Sprache に入れようとしたが、Bopp はこの Semitic には innere Modifikation があり之は非常な特徴なので之を特に獨立させて Organisch の言語としたのである。

(4) Grimm は言語は階段的発達をなすものとして之を三つに分けたる。

1) 全く手を入らぬ *rein ungesucht*

(151)

のもの、つまり影と光の部分が未だ分れない場合といふのである。分業作用をしないものといふ、flexionslos の言語、即ち支那語の如きは之に屬する。

2) Sprachgeist が active に働きかけて或概念が語根に語尾をつけて表はしうるものである。これは flexion の言語を意味する。即ち Sanskrit, Latin, Greek 等である。Synthetisch に屬するものである。

3) flexion が狭く古されてその Partikel が段々に脱落して来たもので英語の様なもの、即ち 2) に對し analitisch なものである。

この Grimm の説は Schlegel や Bopp の説に影響されてゐる。Grimm が einsilbisch の言語とこゝに設けたことは Schlegel や Bopp の考へによつたものであつたが一方 Grimm は affigierende とか agglutinierende を設けず直ちに flektierende に移つてゐることはその相違点である。

(5) Pott の分類法

1) Normale

これは前の人云つた所の flektierende に當

(152)

る。

2) *intranormale*

*isolierende* と *agglutinierende* の二種類のものがこの中にに入る。Norm の下に之が止まつてゐる意味で、未だ Norm に未だ到達しないといふ意味である。

3) *transnormale*

これは America の土人の言語即ち *einverleibende* といふ様な特質をもつ言語即ち総合的言語である。

これは *trans + normale* で Norm の程度を乗り越したものの意である。

*intranormale* 山川, 山が高シ

鬼 + Pronominal suffix

○の如き語尾を有するもの。

この最後のものが最も normale で其に到らぬ前二者の如きが *intranormale* である。兵が鬼に語尾変化の代りに 鬼 そのものが変化する

尚又 Pott の分類法は Schlegel や Schleicher の分類法に載べると尚小さく分れてゐる。即ち前の人々では *affigierende* が一つであつたのを *agglutinierende* と *einverleibende*

(153)

に分けた。

1) *isolierende Spr.* Stoff と Form といふものが未だ全く分れないもの。即ち支那語とか印度支那語である。

Stoff 實辞

Form 虚辞

支那語に於ては各語が皆 Stoff である。

2) *agglutinierende Spr.* は Stoff と Form とが唯外面的にのみ相合してゐるもの。つまり Stoff と Form の部分が一箇にはなつてゐるがどうかすると離れ易い。

大 ナリ

行キ ヲリ

Stoff Form

この場合 Stoff と Form は何時でも離れる。實質的に Stoff と Form が並立してゐるものでない。Tatar 語、トルコ語、Finnisch (フィン語) が之に属する。

3) *Flexivische (flektierende に當る)* Stoff と Form が分つべからざる Einheit となつてゐるもの。

Indo-German とか Hamitic (ハム語)。

(154)

Semitic (セム語) 等.

4.) einverleibende Spr. Wort & Satz との區別を缺いてあるもの. Mexicoの言葉, エスキモーの言葉.

(6) Schleicher (August)の分類法

"Compendium"の初めの方に出てゐる. 三つに分類する.

1. Ungegliederten, unveränderlichen Bedeutungslauten から出来上つてゐるもので, isolierende Sprachen である. つまり Bedeutungslauten (語根の部) があり其が調節されておないもので且つ unveränderlichen であるから語根が変らないものである. 支那語, 安南語, 濟南の言葉, ビルマの言葉.

2. Die Sprachen, die diesem unveränderlichen Bedeutungslauten vorn, in der Mitte, am Ende oder an mehreren Stellen zugleich <sup>間接</sup>Beziehungslaute - <sup>音</sup>vonuns bezeichnet mit S (Suffix.), P (Praefix), i (infix) - fügen können.

(155)

之を Zusammenfügende Spr. といひ, finnisch とか Tatarisch, Baskisch, Bantisch (Bantu 語) がこれに属する.

3. Flektierende Sprachen

Die Sprachen, welche die Wurzel so wie die aus ursprünglich selbständigen Wurzel entstandenen Beziehungslaute zum Zwecke des Beziehungsausdruckes regelmässig verändern können und dabei die Mittel der Zusammenfügung beibehalten.

man → men

Ablaut の如きものを意味することもあるし, 又規則的な Beziehungslaute さへあるものもある.

之に属するものは Indo-germanisch と Semitic である.

この Schleicher の分類は非常に後世有力になつたがこの考へは Humboldt の Rawi-Sprache のことを論じてゐる所に Schleicher が貢ふ所が多いと云つてゐる. Schleicher が分類法を三介法によつたことは Hegel の三分類法の影響

(156)

である。

(17) Max Müller の分類法は大体以上の説に従ってある。即ち

isolating stage  
terminational "  
inflectional "

の三つの stages に分ける。その内容は前に述べたものと大体同じである。

以上言語を三、四種に分けることは今日最も行はれてゐるがその他二、三系統を異にした分類法がある。

(1) Adrien Balbi なる地理學者の Atlas ethnographique du globe, ou classification des peuples anciens et modernes d'après leurs langues の中に世界中の言語を三つに分けてある。

1) langues simples, qui offrent, pour ainsi dire, un assemblage brut de petites formes ou particules agglutinées. Stoff と Form 間

(157)

に密接な関係のないもの。

2) langues par flexion, dont les formes grammaticales, bien plus composées que les premières, annoncent un développement interieur.

3) langues par agglutination, dont les formes grammaticales, encore plus composées que celles des précédentes, montrent plus de tendance pour l'aggregation externe ou agglutination.

この分類法は或点に於ては地理的分類と混雜したと思はれる。旧世界の中 Europe の言語を總て flexion と見做したり Asia のものを總て simple としたりした如き缺點がある。

(2) Paul Hunfalvy (Hungary の言語學者) は四つに分けた。

1) isolating

2) nominal & verbal bases. 其に含まれてゐる母音 (inherent vowel) が変化

(158)

しないのでその vowel が suffix の母音を determine するもの。母音調和が行はれてゐる言語。フィン語、トルコ語。

3) nominal & verbal bases の母音が suffix から逆に影響されるもので Sanscrit, Latin, Greek, Slavonic, German.

4) nominal & verbal bases が inherent vowel をもたず、母音が却って nominal & verbal categories を determine する言語。ヘブライ語、アラビア語等の Semitic の言語である。

(3) Lucien Adam は flexion と Version の用法を區別し、flexion と語尾の變化とし、Version は Wurzel 中の母音の變化に對して用いた。そして五つの分類をした。

1) langues isolantes (支那語、安南、シヤム、ビルマ、西藏の言語)

2) les langues versionnelles.  
(Semitic 語)

3) les langues agglutinantes (-

(159)

にも二にも四にも五にも属しない總ての言語)。

4) les langues harmoniques. (Ural-Altaic 語) □+□ vocal harmony の行はれる言語である。

5) les langues flexionelles. (Indo-European 語)。従来人は Semitic と Indo-European を一緒にしてゐたのを Adam は分けた。

言語分類には大体三分法が行はれてゐるが Sayce などは

1. isolating
2. agglutinating
3. incorporating (Einverleibende)
4. polysynthetic
5. inflexional
6. Analytic

なる分類法をしてゐる。之ほど多数に分類するは要があるか否かは問題である。



第一分冊 正誤表

頁	行	誤	正
4	4	此の若干	此と若干
5	5	考へてゐる	考へてみる
8	3	分けてゐる	分れてゐる
"	9-10	といふ考が起る。(削除)	
"	12	又嗅領	又嗅領、嗅領
9	甲細字	a=求心性	Aa=求心性
"	下448	行くので	行くので
"	下447	発音されるが	発音され得るが
10	7-8	然し或々...といふ。(削除)	
10	15	Langnage	language
"	17	約束	約束
"	19	約束	約束
15	10	泣声	鳴聲
"	17	anomatopoeia	Onomatopoeia
18	10	動詞...が出て	動詞に一定の榮榮な関係が出来て
19	3	言語の中之不可離	言語の成立に不可離
"	20	Sprache	Sprachといふ。
"	21	systeme	systeme
20	1	各様	各種
"	8	tactile	tactile 觸覚

頁	行	誤	正
20	13	partignle	particule
"	16	2ensemble	l'ensemble
"	18	parler	parler.
21	1	(運用)	運用
"	7	thème	theme
"	18	θίβελ	θίβελ
22	18	こいふ	こいふ
23	3	この点と生と	この点を主と
24	2	成文	成分
28	4	児童心理学は	児童心理学に
31	20	かゝる方面と	かゝる方面の
38	4	の名前で	別の名前で
"	7	といふもの	といふのも
"	13	(A.H.D) Waibise	(A.H.D) 又は Waibise
39	2	Democritos	Democritus
41	11	anjugation	conjugation
42	7	Rorma	Roma
43	15	(Hebrew)	Hebrew
45	8	Russia " Catharine	Rossie " Catherine
46	6	Hebrew Chal'den	Hebrew, Chaldean
"	8	Ambarie	Amharic

(162)

頁	行	誤	正
46	13	Polinesia	Polynesia
47	1	完全され	完成され
"	3	の分法	の文法
"	15 or 18	Indo	India
49	6	レ=リと	に力さ
49	15	Coourdou	Coourdoux
48	18	78年	7.8年
50	4	違ひない。	違ひない。」
"	5	1778年	1778年に
"	10	語である	語である。」
"	12	Europe	Europe
"	19	人類の	「人類の
54	2	Paten } latin	Pater } latin
"	8	German	German
56	9	音韻論が	音韻論が
"	11	Lautver-	Lautver-
57	12	OE	O.E. * Old English
58	13	*-Schleiche	*-なる記号を以て共通語根を示す, Schleicher
58	15	(*は共通根を示す)	(削除)
"	19	Schleiche	Schleicher

(163)

頁	行	誤	正
29	10	Flectierende	Flectierende
"	19	消滅	消滅
60	21	文學者は	Jespersen は
61	17	Sausseire	Saussure
62	7	Latin	Latin
"	10	Ascoli	Ascoli
64	11	grammati-...の	grammatikerはかゝる gesetz と
67	22	Lesku	Leskin
69	11	之が	之に
71	1	對稱とする	對稱とする
"	18	発生器官	発聲器官
72	11	(acoustic)	(Acoustic,
72	16	(unacoustic)	(unacoustic)
73	20	呈出	提出
74	19	-の system が	この system は
"	22	意味	意味
75	5 & 17	Schmidt	Schmidt,
"	11	(a)	(x)
"	12	-元	-元
"	17	音の表はす	音を表はす

(164)

頁	行	誤	正
75	22	國際音声	* 國際音聲
76	1	*(association phonétique internationale), 最	
78	図d		
82	7	にキのキと	にキの平と
84	4	Jaschen	Taschen
85	5	此は余は	此は余ハ
	6	或方言に表れ	或方言に現れ
"	17	unsilbisch	unsilbisch
87	2	{nak <sup>h</sup> } のjは	{nak <sup>h</sup> j} のリは
"	15	幅がある	横がりがある
88	13	Resonanzraum	Resonanzlaut
"	17	音力	音か
90	下214	左の図	上の圖
93	下219	raje	rage
	下215	{pɛ} のアより	{pa} のアより
94	9	又っこ	依っこ
"	15	a tête	a tête
95	2	前母音	前方母音
"	14	{sonne}	{zone}

(165)

頁	行	誤	正
96	17	唇と	唇に
"	8	varietier	varieties
"	12	聞かれ	聞かれ
"	16	っこ	従っこ
"	20	Forshammer	Furckhammer
99	18	<u>X</u> . <u>Y</u>	<u>X</u> . <u>Y</u>
13	4	考へこなる。	考へて見る。
"	7	商文學で	商文字で

昭和十一年 月 日印刷發行

編輯發行責任者 金 森 豊  
東京・本郷・本郷六の九

印刷所 東京プリント刊行會印刷部  
東京、本郷、赤門前

發行所

東京プリント刊行會  
東京市本郷區赤門前

(¥ 特236

70

終